

大原野のことやひと
2025

Hello! Oharano

ハロー
大原野

地域の魅力を探して

Let's
Next

地域 × 企業 × 人 対談「大原野という場所でこれからも」

インタビュー「大原野と農業」「大原野出身の若手プレーヤー」「大原野移住ストーリー」

はじめに

なんやかんや「大原野」推進協議会では、大原野「地域ブランド」戦略※に基づき10年間、大原野の活性化に取り組んできました。その道のりを振り返って感じたのは、「まだまだ大原野の魅力を伝えきれていない」ということ。

だから、改めて伝えたい――。
そのために、この冊子を作りました。

この冊子は、10年間の協議会の取組をまとめた“アルバム”であり、大原野の今を届ける“マガジン”です。
これまでの取組を紹介しつつ、大原野で主体的に何かをしている素敵な人たち取材し、一人ひとりの大原野への想いを集めた一冊です。

大原野で生まれ育った人、大原野にUターンやIターンをした人…
縁あって今の大原野というまちをつくっている“人”に焦点を当て、等身大の姿を届けることで、きっと多様な大原野の魅力を伝えることができるはずだと、信じています。

この春から、協議会は新しく、つなぐ・つながる「大原野」づくりプロジェクトをスタートします。みなさまに新しい出発のご挨拶ができればと、この冊子を「Hello! Oharano」と名付けました。

「Hello! Oharano」が、読んでくださったみなさまと大原野をつなぎ、何かが生まれるきっかけになれば幸いです。

2025年3月 桜のつぼみがほころび始めた頃に
なんやかんや「大原野」推進協議会

※大原野「地域ブランド」戦略：2015年2月策定。大原野の地域特性を生かし、「農業」と「観光」に焦点を当てて、取りまとめられた大原野の地域活性化策。

◀フジバカマ（藤袴）

秋の七草のひとつで万葉集にも詠まれ、古くから人々に親しまれてきました。

その貴重な野生種が大原野で見つかり、なんやかんや「大原野」推進協議会では、住民の方たちと一緒に保存活動に注力してきました。

香りが良いことから別名「蘭草」や「香草」とも呼ばれ、花が咲くと蜜を求めて、浅葱色（水色）の羽が美しい蝶「アサギマダラ」が飛来します。





01 はじめに

04 数字と絵で見る大原野

06 大原野「地域ブランド」戦略の振り返り

06 年表

08 取組紹介

10 Landscape of Oharano – Nature –

12 地域×企業×人

大原野という場所でこれからも
上田とうふ株式会社 代表取締役 上田忠宏 × 株式会社小野建築設計 代表取締役 小野富雄

16 大原野産の野菜や花で作る 大原野顔野菜

17 “大原野顔野菜”を作ってみよう

18 大原野と農業

18 10年後も20年後も農業を続ける、そのために
みつばち BunBun クロスケの大原野げんき畑 田中クロスケ

21 大原野で農家になるまで～就農3年目の今、感じること～
洛西ナチュラルファーム 田中秀幸

24 かかし作り、たのしかったよ！

26 Landscape of Oharano – Bamboo forest and Bamboo shoots –

28 大原野出身の若手プレーヤー

先代からのバトンをつなぎ、地域とともにある会社へ
有限会社上田製作所 取締役 上田健太

31 Landscape of Oharano – Nishiyama –

32 大原野出身の若手プレーヤー

原点は祖父との思い出。大切な大原野の竹林を守りたい。
NPO 法人 京都発・竹・流域環境ネット理事 物部瑤也

35 Landscape of Oharano – Harvest –

36 大原野移住ストーリー

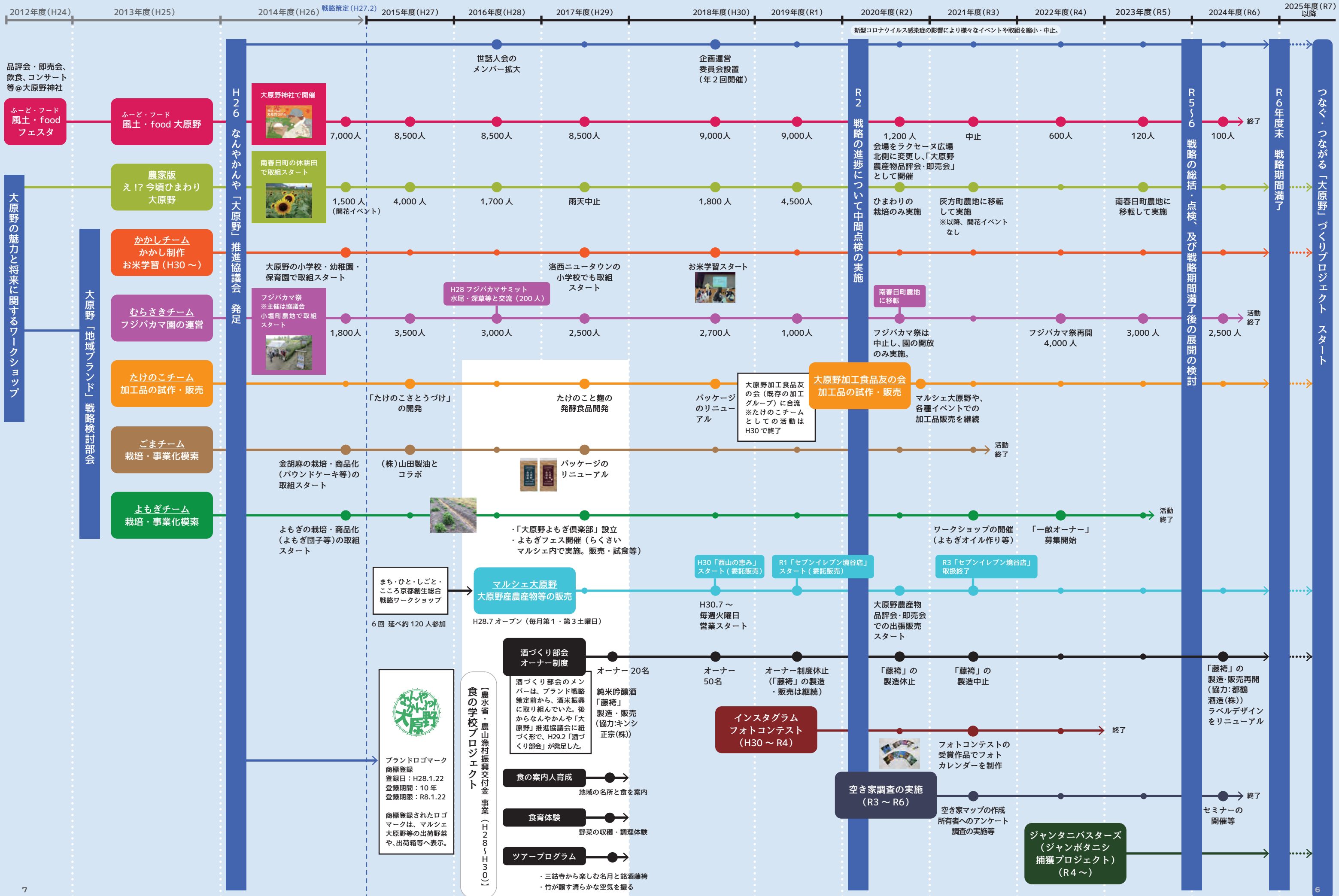
自然と人々の暮らしが混ざり、醸し出されるまちの魅力に惹かれて
京都市認定通訳ガイド・翻訳者・大学英語講師 俣野麻子

39 つなぐ・つながる「大原野」づくりプロジェクト、スタート！

～なんやかんや「大原野」推進協議会がこれからしていくこと～

40 編集後記





大原野「地域ブランド」戦略 取組紹介

むらさきチーム

自然豊かな大原野を愛する

京都府レッドデータブック絶滅寸前種の希少な花「フジバカマ」。京都では絶滅したと考えられていたところ、1998年に灰方明治池のほとりで原種が発見されました。その後、地域住民による保全活動がスタート。むらさきチームでは、フジバカマ園を運営し、フジバカマの栽培や普及に取り組んできました。

☺一言メッセージ

フジバカマが咲く、毎年9月下旬～10月上旬にはイベントの開催や園の一般開放を行い、延べ2万人以上の方にご来場いただきました！ブランド戦略の期間満了と共に、チームでの活動は終了します。「源氏物語」にも登場するフジバカマ、そして自然豊かな大原野を愛するメンバーたちで、10年間がんばりました！



大原野農産物等直売所運営協議会 (マルシェ大原野)

大原野の旬の味を伝える

大原野産の新鮮な農産物やおいしい加工品を販売するマルシェ。オープン当初から、地域の人たちが力を合わせて運営しています。
毎週火曜日9時～11時半、毎月第一・第三土曜日9時～正午（いずれも売り切れ次第終了）、JA 京都中央大原野支店前で営業中です。

☺一言メッセージ

春はたけのこ、夏はナス、秋は新米、冬は大根や花菜など…大原野の旬の味が集まるマルシェです。
スーパーにはない、珍しい種類の野菜に出会えるかも!? 土曜日は地場産の焼き鳥や豆腐、焼き菓子などの出店もあります！



酒づくり部会

大原野の地酒、甘美な余韻と深い味わい

大原野のPRをめざして、部会のメンバーが生産する大原野産の酒米「祝（いわい）」を使った、純米吟醸酒「藤袴（ふじばかま）」の製造・販売に取り組んでいます。

☺一言メッセージ

伏見の酒蔵や大原野のデザイナーの方たちに協力をいただき完成した、大原野の地酒です。大原野で発見された花「フジバカマ」にちなんで命名され、フジバカマの蜜に集まる蝶「アサギマダラ」を模した首飾りのデザインがこだわりポイント。大原野周辺の小売店やイベントで販売しています。
甘美な余韻と深い味わいをお楽しみください！



なんやかんや大原野農家版

大原野を知ってもらうきっかけに

「え!? 今頃」をキーワードに、夏ではなく秋に見頃を迎えるひまわり畑の運営を、地域の有志たちで行ってきました。大原野という場所を知ってもらうきっかけになればとはじめた取組は、毎年テレビや新聞、インターネットなどの様々なメディアで取り上げられています。

☺一言メッセージ

地域の高校生やボランティアをはじめ、多くの方たちの協力を得て、続けることができました。取組開始から10年以上がたつ中、年々夏の暑さが厳しくなり、栽培時期の見極めが難しくなっています。そのぶん、満開に咲いたひまわりを見ると喜びもひとしおです！



大原野加工食品友の会

代々受け継がれてきた大原野の味

1987年発足。大原野の農家の女性グループ。35年以上にわたり、地域に伝承する様々な加工品を作り続けています。一番人気はお味噌。地域の竹林風景にちなんだ「かぐや姫」という名前で、多くの人に愛されています。

☺一言メッセージ

味噌づくりのポイントは、国産の大豆と米で仕込み、大原野神社の地下倉庫で熟成させること！米の割合が多く米麹が醸す上品な甘さと、まろやかな味わいが特徴です。他にもおはぎやジャムなどを作り、地域のマルシェやイベントで販売しています。代々受け継がれてきた大原野の味を、ぜひご賞味ください。



かかしチーム

子どもたちに地域への愛を

子どもたちに地域への愛を育んでもらいたいと、米作りをはじめ農業が盛んな大原野にちなみ、「かかし作り」の授業を行っています。はじめは大原野の小学校からスタートした取組でしたが、徐々に拡大。現在、洛西地域の8つの小学校や幼稚園、子ども園で実施しています。

☺一言メッセージ

これまで約10年間で、延べ1,500人以上の子どもたちが制作に携わり、400体以上の個性的なかかしが作り出されました。毎年、メンバー一同、一生懸命取り組む子どもたちの姿から元気をもらっています！



Landscape of Oharano – Nature –



『大原野の春夏秋冬』

Landscape of Oharano – Nature –



『西山に沈む夕日』

大原野という場所でこれからも

上田とうふ株式会社 代表取締役 上田忠宏 × 株式会社小野建築設計 代表取締役 小野富雄

地域×企業×人



Profile

上田忠宏（うえたただひろ）・左

上田とうふ株式会社代表取締役。1971 年長岡京市に生まれ、同市で育つ。京都市で呉服店の営業職をした後、父親が営む豆腐店の事業拡大を契機に、2000 年に家業に入り、営業を担当。2023 年から 2 代目社長として現職に就く。

Profile

小野富雄（おのともお）・右

株式会社小野建築設計代表取締役。1972 年大原野生まれ。大工を経て、1998 年、26 歳で今の会社の前身となる小野工務店を大原野で開業。2005 年に有限会社小野建築設計として会社化、さらに 2010 年に株式会社化し、現在に至る。

なんかかんや「大原野」推進協議会

では、大原野の活性化をめざし、熱い想いを持った住民の方たちと多岐にわたる取組をしてきました。やりたいことを実現するため、時には大原野にある企業の方々へ協力をお願いし、力を貸していただくことも。その時、企業の側から、協議会の取組はどのように見えていたのでしょうか？

取組開始初期から様々な場面で携わっていただき、現在は協議会の一員でもあるお二人の社長に、お話を伺いました。

出会いは数年前

ー 同世代で、共に大原野で会社を経営されているお二人。普段から交流はあるのでしょうか？

小野 時間がきたら飲みに行ったリ、ゴルフに行ったり（笑）。楽しく交流させてもらっています。お互い大原野を拠点にした会社ですが、出会ったのは 6 年ほど前。上田社長から、大原野に新しく自社製品の直売所を建てたいという依頼をいただいたことがきっかけでした。

上田 それが今、小塩町（おしおちょう）にある「豆腐工房 うえ田直売所」です。その時に色々と話している中、たまたま同じ高校に通っていたと知って。共通の友達がいることもわかり、すぐに距離が縮まりましたね。

地域活性化の取組と会社の交わり

ー お二人が協議会の取組に携わっていたかのようにもなっただけを教えてください。

小野 元々知り合いだった、なんやかんや大原野 農家版のメンバーの方から、2014 年にひまわり畑の取組がスタートした時に、畑に設置する見晴台を作ってほしいという相談を受けたことがきっかけですね。それから毎年、ひまわりが見頃を迎える時期に見晴台を設置させていただくようになりました。

上田 僕たちは 2016 年にマルシェ大原野がスタートした時です。マルシェの方から「出店しませんか」と声をかけていただき、地域の方々が頑張られていることに協力しなければという想いから出店を決めて。初めは僕もよく店番に行っていました。

ー マルシェ大原野については、小野さんも自社の月刊広報誌「NATURAL LIFE」に、毎月マルシェの紹介コーナーを設け 100 円の割引券をつける取組をされていますね。

小野 「NATURAL LIFE」は、大原野やその周辺地域のお住まいにボスティングしていますが、ただ自社を PR するだけの内容では、なかなか目を通してもらえません。100 円券をつけることで、少しでも多く

の方に手に取ってもらえるかもしれないと、僕からマルシェの方にコラボを提案しました。ですので正直に言うと、地域貢献のためにというよりも、僕たちの広報誌を見てもらったためでした。ただその取組をする中で、お客様はお得に野菜を買えて、マルシェも売上増につながる。僕たちも広報誌を手にとってもらえてうれしい。と、関わる人全員が喜べるサイクルを考えていましたね。

大原野の企業として

ー おかげでマルシェ大原野と「NATURAL LIFE」のコラボは息の長い取組になっており、感謝しています。こうした縁があって、お二人には、2022 年に協議会のメンバーに加入いただきましたね。ちなみに協議会の取組以外で、大原野の人たちと一緒にしていることはありますか？

上田 4 年程前から大原野神社で、2 月の節分と 6 月 30 日の夏越の祓（なごしのはらえ）という季節行事の日に、豆腐の振る舞いや販売をさせていただくようになりました。後は、石作町（いしづくりちょう）の株式会社味の王（おう）というたれ屋さん、豆腐にかけるおだしを作ってもらっていますね。どちらの取組も、地元的神社や企業の方たちと一緒に何かをしたいと思い、こちらからお声がけさせていただきました。

小野 とても素敵な取組ですよ。うちは今、ひまわり畑やマルシェとの取組ぐらいいしかしていいいかも。

ー 十分素晴らしい関わりだと思います。小野さんは、本業の中で大原野に新たに移住者呼び込まれていること自体が、地域に関わり、さらに地域を元気にしている側面があるのだと思います。

上田 そのとおりだね。

小野 ありがとうございます。お客様がいてくださるおかげで何とか続けることができています。基本的に大原野の方は外に出て行くことが多いですし、近隣のまちから大原野にだけの人を呼び込めるかが、僕たちのビジネスでは勝負です。僕たちが頑張って大原野にやって来られる人を増やすことが、大原野の将来にもいい影響をもたらすことができる





商品情報などの詳細は
HP でご覧ください！

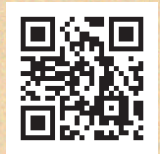


豆腐工房 うゑ田 直売所
〒610-1133
京都市西京区大原野小塩町 15
TEL | 075-331-7508
営業時間 | 10:00～17:00
定休日 | 不定休

- 上田とうふ株式会社
- 1979 年、京都洛西境谷センターにて前身となる上田豆腐店創業。
- 2000 年、上田とうふ株式会社設立、現住所（京都市西京区大原野小塩町）へ移転。
- 京都市内を中心にスーパー、百貨店に製造卸を展開。
- 2018 年、本社前に直売所をオープン。今年で創業 46 年目を迎える。
- 素材や製法にこだわり、一つひとつ丁寧に作られた豆腐は、これまでに数々の賞を受賞。
- また、厳選された大豆を使用し、菜種油で 1 枚ずつ丹精込めて揚げる肉厚な食感の油揚げ「上田の手あげ」も人気。商品はオンラインでも購入可。
- 直売所では、限定メニューの「豆腐ドーナツ」や揚げたての手あげが楽しめる。



イベントなどの最新情報は
HP でご覧ください！



株式会社小野建築設計
〒610-1123
京都市西京区大原野上里南ノ町 10
TEL | 075-335-2254
営業時間 | 9:00～18:00
定休日 | 毎週水曜日

- 株式会社小野建築設計
- 地元・大原野を活性化し、地域に貢献したいという想いの下、小野社長が 1998 年に開業。
- 今年で 27 年目を迎える。
- 「のんびりぐらし」をキーワードに、大原野を中心に美しい自然に馴染む木の家づくりに取り組む。京都府産木材を積極的に利用した家は、様々な賞を受賞。新築住宅はもちろん、リノベーション、地元工務店の強みを生かした移住のための土地探しのお手伝いも担う。
- また、移住前に「のんびりぐらし」を体験できる施設「のんびり舎」の運営や、社長の実家が代々受け継いできた田んぼでの米作り体験、「地域情報レター」として広報誌「NATURAL LIFE」を毎月発行するなど、大原野の魅力を伝える様々な取組を行っている。

さるのではないかと考えています。やっぱり人が増えないことには、地域の活性化は始まりませんから。

本業だけを頑張っていれば良いわけではない

― お二人とも、神社での豆腐の振る舞いや広報誌「NATURAL LIFE」での取組など、本業から少しはみ出して、地域と関わることを自ら企画し、実現されていますね。

小野 うまく言えないですけど…本業だけをやっていても、誰も見向きもしてくれません。そこで、少しでも地域の人たちとつながることができるよう、「NATURAL LIFE」ではマルシェ大原野の割引券だけでなく、地域の素敵なお店や取組を紹介する読み物を一面に載せる工夫もしています。

上田 本業を一生懸命するのは当たり前のことやもんね。そこからどう自分たちの事業に興味を持ってもらえるかっていうのを考えつつ、会社として何か地域の役に立てたらと。

― それは大原野という地域の一員として、会社が地域に役立つ存在でいたいということでしょうか？

小野 そうですね。地域のみなさんのおかげで、僕たちのビジネスは成り立っていますから。お礼に何かを地域へお返ししようとするのは、ビジネスとしては当然のことだと思います。上田社長とは、いつもそうい

うことを話していますよね。

上田 はい、たくさん地域のお世話になっていますから。たぶん商売をしている人たちはみんな、同じようなことを考えているんじゃないかなあ、と思います。

「大原野」に対して今感じること

― 仕事をすることで「大原野」の知名度について、感じていることはありますか？

小野 大原野に移住される方は、元々は京都市内の桂川西岸の駅前周辺に住んでいる方が多くて。後は長岡京市周辺からも。大阪方面からは阪急沿線に沿って、吹田市ぐらゐが多いです。自然豊かな場所であるが、地域として大原野が認知されているのが、そういった範囲のようですね。

上田 東京や大阪の百貨店などの催事で販売する時には、「京都・大原野」という地名を推していますが、左京区の「大原」と間違われることが、まだまだ多いです。「大原」知ってるよ。三軒院があるところですよ？」と言われて、いや違うよって（笑）。一方で催事を重ねることに、大原野を「存知の方が増えているようにも感じていますね。

― 協議会も「大原野」という地名をこの 10 年間で、一生懸命 PR してきました。メディアに取り上げていただく機会も多かった一方で、まだ

まだ伝え足りていない部分もあり…引き続き発信の必要性を感じているところです。では最後に、これから大原野に対する想いをお聞かせください。

上田 商売柄、僕はもつと人が大原野にたくさん来て、住む人も増えていったらいいなと思います。ただ大原野で暮らしている方たちが、実際のところどんなふうにいるのか、か、気になりますね。賑わいを望まれているのかどうかと、僕自身は今、大原野で暮らしていますが、仕事が忙しく、なかなか日々の暮らしに目を向ける余裕がありません。以前は、長岡京市の自宅から、朝日に照らされた西山を見ながら、毎朝大原野の事務所へ通うのが癒しのひと時でもありました。今は残念ながら、自宅から事務所まで短い距離を平行移動して（笑）。西山を眺める機会が減ったのが残念ですね。

小野 大原野を拠点に、「自然を取り入れた豊かな暮らしをお客様に提供していく」という仕事の軸は、この先も変わりません。そのために、僕たちは「のんびりぐらし」という名称で、田舎暮らしの魅力を発信しています。一方で上田社長と同じように、僕も大原野に住んでいるものの、日々に追われて、暮らしを味わいきれていません。ですのでこれからは、大原野での「のんびりぐらし」を僕自身ももっと深掘りしていきたいなと考えています。大原野のよう

な昔の田舎では、近所のおっちゃんやさんが家に来てお茶を飲んで、帰っていく…そういうオープンな暮らしのコミュニティがありました。究極はそういう「のんびりぐらし」の場を作りたいなと。犬の散歩をしている人が、通りがかりにふらっとコーヒーを飲んでいくとか、いいですよ。

上田 会社としても、祭りのなこととか、何かもつとできたらいいなと思います。

小野 そうですね。別に大がかりなことじゃなくても。これからの時代は、時間もお金もかけすぎず、小さくスピーディーに色々としていくことが良いような気がしています。

― これからもぜひ一緒に楽しいことをしていきたいと思います！本日はどうもありがとうございました。



◀対談終了後、幸せを招くとされ、「ダブルレインボー」と呼ばれる 2 本の虹が出ていました

“大原野顔野菜” を作ってみよう

野菜で作る色とりどりの顔！

大原野の野菜が手元がない方も、野菜を切り取って“大原野顔野菜”を作ってみましょう！

このページを
コピーして
使ってね！



つくりかた How to make !

使うもの：竹ザル（顔のベース）、野菜（顔のパーツ）

- 1 竹ザルの上に野菜を置きながら、どんな顔が作れるか考えてみよう。
- 2 好きな顔が決まったら、野菜を切り取って、竹ザルに貼ってね。
- 3 出来上がった作品は、好きなところに飾って楽しもう。

大原野産の野菜や花で作る

おおはらの

大原野 顔野菜

かおやさい

同じように見えて、形もサイズも一つひとつ違う野菜や花。

上手に並べると…にっこり笑顔の出来上がり！

マルシェ大原野に集まる色とりどりの農産物から生まれた、楽しいアート作品。

それが「大原野顔野菜」です。

顔に見えるコツはズバリ…「目を左右対称に配置すること」！

Faces made with Oharano vegetables.



10年後も20年後も農業を続ける、そのために みつばちBunBunクロスケの大原野げんき畑 田中クロスケ

大原野 と農業

ビニールハウスに入ると目に飛び込んできたのは、イチゴの写真と名前がずらりと並んだ楽しいボード。「みつばちBunBunクロスケの大原野げんき畑」は、なんと27種類ものイチゴの食べ比べが楽しめるイチゴ農園です。

「こんにちは〜！」と朗らかに迎えてくださったのは、ピンク色のユニフォーム、頭には看板猫「社長」・ミケチンのサンバイザーの姿が印象的な園主のクロスケさん。大原野で就農し、今年で13年目を迎えました。「お客様を笑顔にしたい」と猫耳サンバイザーやカチューシャの貸し出しをはじめ、ユニークなアイデアが随所に光るイチゴ農園は、どのようにできたのでしょうか。お話を伺う中で見てきたのは、農業を続けるため、ひたむきにもがき続けてきたクロスケさんの姿でした。

職人の仕事に憧れて

農家になる前は、京都市伏見区に住み、市内で人体模型の製造や法衣店の営業といった、ちよつぱり「変わった」仕事の遍歴を重ねてこられたクロスケさん。農業の道に進んだきっかけは、法衣店時代に職人の方々と出会ったことでした。「布を染めるところから携わり、法衣を作りあげていく職人さんの仕事に憧れを感じたんです。僕もゼロから何かを完成させていく仕事をしたいと思うようになり、ハローワーク

で探していたら、『農業』が目にとまって。元々、農業はいつか定年退職した時にできたらいいなとぼんやり考えていたのですが、当時の流行語が林修先生の『今でしょ！』という言葉：本当に農業をしたいなら『今でしょ！』と（笑）」

その言葉に背中を押されたクロスケさんは早速、京都市が主催する新規就農者の養成プログラムを受講。1年間、市内各地の農園で実践を重ねながら、農業を学んでいく中で出会ったのが大原野でした。「大原野の田園風景や出会った方たちの人柄に惹かれ、ここで農業をしたいと思ったんです。ありがたいことに、研修先の方が『本気ですんなら』と、農地や家やトラクターといった、必要なものを全部手配してくださって」

まさに『今でしょ！』の言葉どおり、スपीディーに農家になったクロスケさん。始めは、地域の特産物であるナスの生産からスタートしました。「農業の師匠である研修先の方から『農業は地域の人の関わりなくしてできない仕事。自分のやりたいことや売上を優先するよりも、まずは地域に馴染むことが大事』だと教わりました。ならば、地域の先輩方に教えていただきながら、ナス名人になろうと」

その中で、自分がやってみたいことも少しだけ織り交ぜることに。「地域の方々と同じように、一般的

な紫色のナスを作って市場に出荷しながら、さらに白色や緑色のカラフルなナスも作ったんです」

大原野で馴染みのない色のナスは、最初は全然周囲に認めてもらえませんでした、と苦笑するクロスケさん。それでも作り続け、自身で販路を開拓。数年後にはスーパーに「クロスケの彩りナス」というコーナーを設置してもらえるまでに。「その頃には、師匠にも『お前は普通にやるより、カラフルなナスをしていった方がいい』と言ってもらえるようになりました。自分がやりたいことを人に理解してもらうには、努力と時間が必要だと学びましたね」と振り返ります。

農業を続けるために選んだイチゴ

次第に大原野周辺の飲食店やカフェでの出張対面販売にも取り組みつつ、ナス名人をめざして販路を増やしていったクロスケさん。しかし――。「自分なりに精一杯頑張っていたものの、売上が思ったようについてこなくて。当時僕は40歳を過ぎた頃でしたが、今のやり方を60歳、70歳まで続けるのは難しいぞと。この先年齢を重ねて体力も衰えていく中で、農業を続けていくためにどうすればいいのか考えるようになりました」そこで思い浮かんだのが、イチゴという選択肢でした。

「その頃、たまたま視察でイチゴ農園を訪れたことがあったり、周囲の

農家さんからイチゴ栽培が話題に上ったりと、何となくイチゴのことが頭にありました。また、ナスの対面販売を通してお客様とふれあう楽しさを知り、ならばお客様に農園まで来ていただくイチゴ狩りをしようと、就農5年目でナスからイチゴに方向転換することを決断しました。体力的にもイチゴ狩りなら収穫や出荷の労力がある程度省けることも、農業を続けていくためには現実的でした」

とはいえ、イチゴ狩りができる施設を整えるためには多額の出費が伴います。「経営者として良いのかはわかりませんが、投資額に対して売上がこれだけで：と数字のことばかり考えていたら、いつまでたってもスタートできません。大原野で農業を続けていくために、イチゴをやるよと決めたら、もうやるしか選択肢はなかったです」

仲間づくりを大切に

「1人で農業を始めた時から1人の力だけでやることは諦めていて（笑）、仲間を増やすことに重点を置いていました」というクロスケさんの農園にはいつも誰かが、栽培や販売の作業をしています。

「今はアルバイトの方が2人と、地域の就労支援事業所から毎日7人の方にお越しいただいています。さらに大原野周辺を中心に、1年配のボランティアの方が10人程、それぞれ

週に1〜2回ほど無理のない範囲で来てくださっています」

元々、人とコミュニケーションを取ることは全然得意ではなかったのですが、とクロスケさん。

「ありがたいことに、ナスの対面販売をしていた時に会ったお客様が『頑張ってるか』と声をかけて手伝いに来てくれたり、次はその人のお友達がやってきてくれたり。就農した時から、助けてくれる人がいつも周囲に居てくださったから、僕は農業を続けてこれたのだと思います」

描いていた「未来」に今はいるから「今は毎日がとても楽しいですよ」と、クロスケさんは微笑みます。

「ナス農家の時は出荷の都合上、朝3時半に起きて、『未来のために今を頑張るんだ』と自分に言い聞かせて、収穫作業に動んでいました。その時代に培った人とのつながりや販売の経験が、イチゴ農家になっても生きていて、今ようやく理想の農業ができつつあります。おかげで、ナスの収穫をしながら思い描いていた『未来』に今、自分はいんだと感じます。だからもう、楽しむしかないと思って毎日（過）しています。もちろん、まだまだ失敗も繰り返しながらですが」

柔らかい表情でそう語るクロスケさん。60歳そして70歳になっても、「イチゴ畑のクロスケさん」として、たくさんの人を笑顔にされていくことでしょう。

Profile

田中クロスケ（たなかくろすけ）

1973年京都市生まれ。製造や販売を経て、2013年から大原野でナス農家として、農業をスタート。2018年にイチゴ農家に転身。イチゴ狩りを通じた食育にも力を注いでいる。

大原野 と農業

大原野で農家になるまで、就農3年目の今、感じることを

洛西ナチュラルファーム 田中秀幸

Profile
田中秀幸（たなかひでゆき）

1972年三重県生まれ。大学卒業後、アパレルや医療機器販売、製薬会社での営業職を経て2022年から大原野で農業をスタート。オクラを中心に、少量多品目栽培を行う。

イチゴ狩りと直売



◀オリジナルのパッケージが目をひくイチゴの直売コーナー

- みつばち BunBun クロスケの大原野げんき畑
- イチゴ狩りは 10:00 ～ 11:15、13:30 ～ 14:45 の二部制（事前説明の15分含む）。60分食べ放題。大人(中学生以上)3,300円、小学生2,750円、
- 幼児(3～5歳)2,200円、幼児(1～2歳)550円
- 練乳やパンなどの持ち込み OK。要予約。農園ハウス内で直売も行っている。10:00 ～ 売り切れ次第終了。
- 〒610-1153 京都市西京区大原野南春日町 1734-1
- 最新情報は HP からチェック！



野菜の直売



◀農福マルシェの様子



田中さんの野菜は、マルシェ大原野やイオンモール桂川のわくわく
広場などで購入可。2025年1月からは、京都市西京区にある就労継
続支援B型事業所 Find Life と一緒に農福マルシェを開催。毎週月・
水曜日 10:00~16:00、事業所の軒先で朝採れ野菜を販売している。



「この地域に出会えたから、僕は今、農業をできているんだと思います」畑を見つめてそう語るのは、営業職で約20年勤めた製菓会社を退職後、大原野で農家になり3年目を迎えた田中秀幸さん。J Aが「京おくら」というブランド名で産地化を進めているオクラを中心に、様々な野菜を育てています。

「農業に必要なものは何も持っていなかったです」という田中さんは、どのようにして農家に転身したのでしょうか。簡単ではなかったその道のりを紐解きました。

会社員時代に始めた家庭菜園
農家になる前は、趣味で家庭菜園をしていた田中さん。

「京都で暮らし始めるまでは、大阪の豊中市に住んでいました。あるとき、市の広報誌で市民農園の利用者募集を見つけて、なんとなく応募してみたんです。人気でなかなか当た

「まず『農地』、『お金』、『技術』の3つが必要だと。農家出身ではない僕には『農地』はもちろんありませんし、当面の生活費や設備投資のための『お金』も十分にあるとは言えません。家庭菜園レベルの『技術』

「京都府の相談窓口で、新規就農者は『まず農地を見つけてください』とアドバイスをもらいました。『農地さえ見つかれば、お金と技術は何とかなるよ』と。ありがたいことに、師匠をはじめ地域の方が探してくださ

もしかりでした」
年輪的にも今から就農するのは厳しそうだと感じ、他の再就職先を探しつつも農業が諦めきれなくて、と田中さん。そこで、まずは農業のお手伝いをさせてもらえる所を探そうにしました。

「運よく妻の知り合いを通じて、大原野で畑を借り新規就農した野菜農家さんとなることができました。そして、その方の畑で週3日お手伝いをさせていただけることになったんです」
念願の京都市内で農業を学ぶ目途が立った田中さん。

「退職の意向を伝えてから、3カ月後の2021年12月末で会社を辞めて、年明け早々、1月4日には畑に行っていました(笑)。一生懸命、もう必死で学びましたね。お手伝い先の農家さんも、サラリーマンから農家になった経歴をお持ちで、惜しみなくノウハウを教えてくださいました。僕の農業の師匠です」

「退職の意向を伝えてから、3カ月後の2021年12月末で会社を辞めて、年明け早々、1月4日には畑に行っていました(笑)。一生懸命、もう必死で学びましたね。お手伝い先の農家さんも、サラリーマンから農家になった経歴をお持ちで、惜しみなくノウハウを教えてくださいました。僕の農業の師匠です」

ハードルを乗り越えて
そして大原野で、農業の基盤となる農地も、想定より早く見つけることができました。

農業は楽しい
就農3年目を迎えた田中さんに、「野菜作りで大切にしていること」を尋ねると「感謝の気持ち」という答えが返ってきました。

「米粒や豆粒サイズの小さな種からグングン大きく育っていく様子を見てみると、野菜は『生き物』だと感じます。そうしてできたものを、枝からもぎ取ったり、土の中から抜いたりする瞬間に『生き物から食べ物』に変わるわけで。だから、いつも感

「米粒や豆粒サイズの小さな種からグングン大きく育っていく様子を見てみると、野菜は『生き物』だと感じます。そうしてできたものを、枝からもぎ取ったり、土の中から抜いたりする瞬間に『生き物から食べ物』に変わるわけで。だから、いつも感



なんやかんや大はらのみなさんへ
かかしのつくり方をいもうた教えてくだ
うございませう
わたしはかかしをつくるのがはじめてだけど
かかしをつくるのがたのしかったです。そのあけは
しんぶんしをききたり、くをききたりするの
がたのしかったです。

なんやかんや大はらのみなさんへ
かかしのつくり方をいもうた教えてくださ
て、ありがとうございます。
わたしは、かかしは、ふくのとこころにし
んぶんしを丸めて入れることでふくくら
んで見えるから、入れるんだとわかりま
した。
わたしは、かかしをつくるのがはじめて
だったから、とてもたのしかったです。

なんやかんや大はらのみなさんへ
かかしのつくり方をいもうた教えてくだ
さってありがとうございます。
ぼくはかかしのつくり方なんてことも知
らなかつたけど、つくり方を教えてくれた
しんです。
大人になつたら、学校で教えてあ
げたいです。

素敵なおい出！

かかしづくりを教えてください
みなさまへ

すてきなかかしづく
りになりました。ありが
とうございませう
また、かかしづくりを
したいです
かざられるのをたの
しみにまっています。
大はらの小学校
2年生より

楽しい！



かかしづくりを教えてください
みなさまへ
すてきなオキケなありが
とうございませう
早くかざられるのをたの
しみにまっています。
大はらの小学校
2年生より

みんなありがとう！

zzzz.....



かかし作り、たのしかったよ！

かかしチームでは、これまで述べ1,500人以上のこどもの

みなさんと400体以上のかかしを作ってきました！

かかし作りの授業は、毎年とってもワイワイ賑やか。

これまでに参加いただいたみなさんの声をご紹介します♪

楽しかったよ！



かかしづくりを教えてください
みなさまへ
すてきな体けんをありが
とうございませう
早くかざられるのが見
たいです
かざられるのをたの
しみにまっています
大はらの
小学校
ありがとう 2年生より

大はらのかかしチーム
はくちゅう、まにけ
てくれてありが
うございませう
しんぶんしをきき
たり、くをききたり
するの
がたのしかったです。

いいなー！

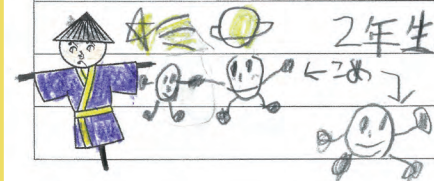


ありがとう！

大はらのかかしチームさんへ
きつたて、ありが
うございませう
きつたて、ありが
うございませう
きつたて、ありが
うございませう
きつたて、ありが
うございませう

嬉しいなー！

かかしづくりを教えてください
みなさまへ
とてもすてきな体けんあり
がとうございませう
とても楽しかったです。
☆≡ ⊕ ☆
かざられるのを楽しみに
まっています
大はらの小学校
2年生より



なんやかんや大はらのみなさんへ
かかしのつくり方をいもうた教えてくだ
さってありがとうございます。
わたしはかかしのつくり方のいもうたをい
うた教えてくれました。
わたしはかかしのつくり方のいもうたをい
うた教えてくれました。
わたしはかかしのつくり方のいもうたをい
うた教えてくれました。

大はらのかかしチームさんへ
かかしチームさん
2年生のみんなにかかし
づくりをおしえて、ありが
うございませう。はんでり、ば
なかしがつくれました。
ほんとにありが
うございませう。茶会もか
かしのたのし
みです。こめのこともおし
えてもら、てす
くうれい、ば
なかし、め、ありが
うございませう。



『たけのこシーズン到来!』



『竹林と木漏れ日』

先代からのバトンをつなぎ、地域とともにある会社へ

有限会社上田製作所 取締役 上田健太

大原野出身の 若手プレーヤー

「生まれ育った大原野に帰ってくることを、とても楽しみにしていました」笑顔でそう話すのは、金属プレス加工を専門とする有限会社上田製作所4代目の上田さん。家業を継ぐため、3年前に勤め先の東京からUターンし、本業や地域貢献について考える日々を過ごしています。

一度離れたからこそ見えた大原野の魅力は、山や池、田畑が広がる自然豊かな場所でありながら、市街地にも出やすい「いい感じの田舎感」。幼少期にカブトムシやザリガニを採って遊んだ時の景色が今も残る大原野に、可能性を感じていると話します。

大原野一筋56年の町工場として
この地で、1969年に創業した上田製作所。

「金属線を切ったり曲げたり磨いたりする仕事をしている会社です。自

動車のエンジンなどに使う小さな部品を、精度高く量産することを得意としています」

半世紀以上積み重ねてきた実績は折り紙付き。しかしながら、はじめから今の仕事に特化していたわけではありませんでした。

「創業者の曾祖父は、9人兄弟のいわゆる『田舎の長男』。家族を養わなければと、豆腐屋をしたり、自動車整備をしたりと、色々な事業に挑戦したそうです。その中で、知り合いの紹介で始めた金属加工の仕事が軌道に乗り、今に至ります」

創業時から一貫して大切にしてきたことは、お客様の困り事に真摯に向き合うこと。

「極端な話、金属線や自動車部品づくりにこだわってはいないんです。たまたまそういうものを扱うようになり、『次はこんな加工できる?』というリクエストに対して、『やってみましょう』と応えていたら事業が広がっていきました。その結果、地域に雇用を生み出すことにもつながりました。家族だけでなくお客様や従業員も含めて、身近にいる人たちを幸せにしようとしてきた会社だから

と、これまでの歩みを見て感じています」

「人」や「働く」という言葉が人生のキーワード

3世代で暮らす自宅のすぐ隣に工場があり、祖父や父が働く姿を間近で見ながら育った上田さん。3兄弟の長男だったこともあり、幼い頃からいつかは自分自身が家業を継ぐことをぼんやりイメージしていたそう。その影響もあってか、「人」や「働く」ことに自然と興味を持っていたと振り返ります。

「昔から誰かと一緒に頑張ることが好きで、高校までは野球に打ち込み、大学生になってからはラグロス部で汗を流していました。大学で人間行動学を学んだ後、将来家業を継ぐときにも役立つだろうと、求職者と企業をマッチングする人材系の会社に就職。7年間東京で働きました。営業担当になった当初は、数字の実績だけを見て仕事をしていました。すると、あるとき上司に『お前は誰のために仕事をしているんだ』とひどく叱られて。それで我に返りました。職を求めている人、働き手を求めている企業双方に喜んでもらうための仕事なのに、数字だけ見ているダメだなって」

時には、新人の自分よりずっと年上の求職者が、マッチング先の会社に突然来なくなってしまい、上田さんが謝りに行くこともあったとか。

「社会には色々な人がいるということ、誰のため、何のために仕事をするのかを考える大切さ。この2つを勤め先で学ばせてもらいましたね」

会社は「人」でできている

東京での経験を糧に、上田さんは今、父と二人三脚で家業の経営に携わっています。その中でもキーワードはやはり「人」だそう。「今は技術面の勉強をしつつ、新規の取引先を増やしたりHPを整えたりといった営業や広報の仕事をしながら、会社を色々な方に知ってもらうことに注力しています。というのも、日本全体で人口が減っている中で、働き手となる『人』の確保が、今後ますます課題になってくるでしょう。『人』なくして、会社は成り立ちません。僕たちの仕事に少しでも興味を持ってもらえたらと、工場見学ツアーやイベントでのワークショップにも取り組んでいます」

本業も地域も大事にしていきたい
少し先の未来を見据えながら、一つずつ丁寧に足元の課題解決に取り組む上田さん。

これからの会社の展望について尋ねると、まっすぐな答えが返ってきました。

「まずは、本業の金属加工の仕事を広げていきたいですね。これまでの営業活動を通じて、僕たちの技術を求めている方々が、まだまだ全国に

Profile

上田健太（うえだけんた）

有限会社上田製作所取締役。1992年大原野生まれ。高校生までを大原野で過ごす。神戸での大学生生活、東京での会社員生活を経て、結婚を機に家業を継ぐため2022年に大原野へUターン。京都・滋賀を中心とした若手後継者のコミュニティ「アトツギラボ」に参加し、積極的に情報交換やイベント参加を行っている。

Landscape of Oharano – Nishiyama –



『秋の西山』

工場見学ツアー



- 「汚い」、「臭い」といったネガティブなイメージを持たれやすい町
- 工場に対して、そのイメージを変えていきたいと、親子で楽しめる
- 工場見学ツアーを不定期で開催。
- ツアーには、金属を学ぶワークショップや焚き火台づくりなど様々なプログラムを盛りこみ、モノづくりの楽しさを伝えている。
- 開催情報は上田製作所公式 note からチェック！
- 有限会社上田製作所
- 〒610-1131 京都市西京区大原野上羽町 8-1
- TEL 075-331-3100
- 営業時間 9:00 ～ 17:00
- 定休日 土日祝
-



原点は祖父との思い出。大切な大原野の竹林を守りたい。

NPO 法人京都発・竹・流域環境ネット理事 物部瑤也

大原野出身の
若手プレーヤー

Profile

物部瑤也（ものべさや）

NPO 法人 京都発・竹・流域環境ネット理事。1996 年大原野生まれ。幼少期から祖父母の竹林に通っていた経験が礎となり、現在、放置竹林という地域課題の解決に携わる。将来的には、家業の農業を継いでいくことをめざしている。



荒廃した放置竹林を整備し、自然環境の保全をめざすNPO法人の理事として、草刈り機やチェーンソーを手にするさと・大原野の竹林と向き合う日々を送る物部さん。「今の自分の姿は想像もしていなかったです。大学を卒業した後は、どこかの会社に就職する道を歩むものだと思っていましたから」と笑います。

竹林は大好きな場所

物部さんと竹林の出会い、小学生の頃でした。

「春になると親と一緒に、祖父母が管理する竹林へたけのこの収穫のお手伝いに行くようになったことがきっかけです。祖父が丁寧に手入れした竹林には、柔らかな陽射しが差し込み、笹の葉がサワサワと風で揺れる音や明るい鳥のさえずりが聞こえました。早朝のキンと冷えた空気の中で、作業をしていると心がとても落ち着きましたね」

手伝いに行くたび、どんどん竹林が好きになっていったと振り返ります。

「祖母は、私が来ると大喜びしてくれました。孫の中で私だけが唯一、朝早くから喜んで作業に来ていたようです。幼かった私はそんな祖母の姿を見ることがうれしく、一生懸命手伝いました。早起きも体を動かすことも全然苦ではなかったですね。私にとって竹林は癒しであり、作業をがんばると褒めてもらえる、

いいことだらけの場所だったんです（笑）」

祖父の姿に憧れて

毎年竹林に行く中で、物部さんにはある想いが湧いてきました。

「収穫が難しかったのこを、土の中からスツと掘り上げる祖父の姿がとてもカッコよかったんです。私も祖父みたいに掘れるようになりたいと思いました」

熟練の技を持つおじいさんにとって、農業は生きがいと言える、かけがえのないものでした。「祖父は大人しい性格の私とは真逆で、大きな声で話すお喋りな人。幼い頃はそんな祖父がちよっぴり怖くて、じつくり話ができませんでした。その分、きれいに管理された竹林を見て、祖父の想いを感じていましたね。祖母からも『おじいちゃんは農作業が好きで、竹林や畑に毎日足を運び、雑草を抜いたり土を耕したりしているんだよ』という話をよく聞いていました」

祖父との印象的な思い出があつて、と物部さんは続けます。「たけのこを掘る練習を始めた小学校高学年くらいのおときでした。祖父が私の心臓辺りを指して『たけのこも人間と同じように生きているんや。そう思っで掘るのが大事やで』と、教えてくれたんです。それがとても心に響いて。今でもたけのこを掘るたびに、その言葉を思い出しています」

人生の方向転換

おじいさんをめざして、たけのこを掘る練習に励みつつも、自身が後継者になることは全く考えていなかったと話す物部さん。将来は幼稚園から習っていた英語を生かした仕事に就くことをイメージしていました。ところが、「語学力を伸ばすため進んだ大学で、周りは自分よりはるかに英語ができる人ばかりでした。スキル不足を痛感しながら、就職活動をスタートし、『私がやりたいことってなんだろう？』と悩んでしまつて」

同級生の就職がどんどん決まり、焦りだけが募っていく中、大学4年生の夏に物部さんの祖父が他界しました。「ふと、『祖父との思い出がつまつた竹林はこの先誰が管理していくんだろう？』と考えたんです。そして自分がこれからやるべきことは、祖父に代わって大原野の竹林や田畑を守っていくことではないかという想いがだんだんと強くなりました。祖父の亡き後、父たちが管理している農地を、孫の私も受け継いでいきたい、そのために就職活動をやめ、農業に専念しようと思った。急な

進路の方向転換に不安はありましたが、恐る恐る親に想いを打ち明けたところ、『自分のやりたいことをやればいい』と背中を押してもらえたことで、気持ちが固まりましたね」

地域の方たちと楽しみながら

現在、物部さんは縁あって地元・大原野のNPO法人で、竹林整備のボランティア活動やイベントの運営などの様々な業務を担当しています。

「私たちがめざしているのは、『放置竹林ゼロ』です。竹は繁殖力が強いので、手入れされなくなつた竹林は瞬時に荒れてしまいます。祖父をはじめ、先人の方たちが大切に守ってきた大原野の竹林を、私は全部守ってきたい。そう本気で思っています」と力を込めて話します。

竹林所有者の高齢化が進み、竹林を整備できる人材の育成が急務になっている今、NPOでは一人でも多く担い手を増やすべく、竹灯籠を作るワークショップや竹を使ったライトアップのイベントを通じて、活動のPRに取り組んでいます。

「放置竹林という地域課題に対して私たちNPOだけで取り組むのではなく、地域の方たちと一緒に、楽しみながら取り組んでいくことが大切だと考えています。これから色々な機会を作って、たくさんの人たちと交流していきたいです」

「仏壇の前で、祖父に活動報告をしているんです」と微笑む物部さん。「今は竹で手一杯ですが、ゆくゆくは田んぼや畑のことも学んでいきたいです」と夢を携え、今日も大原野の竹林に向かいます。



Landscape of Oharano – Harvest –



『もうすぐ収穫』

活動ミニ紹介

放置竹林の整備活動をしながら、
イベントやワークショップも随時開催中



● 放置竹林ゼロをめざし、活動のすそ野を広げるべく、門松づくりや
● 竹箸づくりのワークショップ、竹灯籠を使ったライトアップなど、
● 年間を通して様々な活動を実施。また、情報発信にも力を入れている。
● 最新の活動情報は、ブログ(<https://kyototakenet.hatenablog.com/>)や
● Instagram (@kyoto.takenet) からチェック！
● NPO 法人京都発・竹・流域環境ネット
● 〒610-1133 京都市西京区大原野小塩町 73-1



自然と人々の暮らしが混ざり、醸し出されるまちの魅力に惹かれて

京都市認定通訳ガイド・翻訳者・大学英語講師 俣野麻子

大原野 移住ストーリー

大原野西部、なだらかな稜線が広がる小塩山（おしおやま）。

麓の集落にある、瓦屋根の民家で出迎えてくれたのは、大原野に移住して12年目になる俣野さん。

「いまだに毎日のように思っているんです、『ここにきてよかったなあ』って」

家を眺め、しみじみと語るその表情から、大原野での暮らしをこよなく愛している様子が伝わります。自然豊かな環境と街なかに出やすい利便性などから、移住者も多い大原野。

「このまちの空気や土地柄が、私にはよく合うようです」と自然体で話す俣野さんは、どのように大原野で過ごしてきたのでしょうか。

人とのつながりがある暮らしを求めて
大原野に来る前は、グラフィックデザイナーであるオーストラリア人の夫・ダンカンさんと、大阪府高槻市のマンションに暮らしていた俣野さん。「駅近ながら周囲には田んぼがあり、のどかな場所でした。ただ、賃貸だったこともあってか、周囲との関係性が薄い生活が私たち夫婦には寂しくて。もっと周りの人とのつながりを持てる場所で暮らしたいと思い、移住を考えるようになりました」そこで移住先の候補として頭の中に浮かんだのが、以前訪れた大原野でした。

「勝持寺（しょうじじ）という桜の名所があることを知り、夫婦で大原野へ足を運んだことがあったんです。田園風景が広がる落ち着いたまちの雰囲気がとても良く、夫と『こんなところに住めたらいいね』と話していたことを思い出して。ふと大原野の物件情報を、インターネットで検索してみたんです」そこで、俣野さんに運命の出会いが待っていました――。

とにかくこの家に住みたい！

「検索結果の中に、この家の情報があつたんです。ですが、販売価格が

予算オーバーしていて、駅から遠く立地も不便でした。移住先にはできないかなと思いつつ、試しに内覧へ行ってみることに。玄関に入っただけの中を眺めた瞬間、『ここに住みたい！』と、強く思っただんです」理由はうまく説明できないのですが、と、当時の心境を振り返る俣野さん。

「2階から見えた美しい山並みの景色にもぐっと心を掴まれて。みるみる予算やアクセスのマイナス面は忘れてしまいました（笑）」

合理的思考のダンカンさんも、はじめは条件面でしぶっていたものの、この家に惹かれるものがあつたよう。ほどなくして、二人でここに移り住むことを決めました。

「人とのつながりを求めている移住なのに、『近所さんたちのことを全然知らずに来てしまったという（笑）。今思い返すと、賭けだったなあと感じます。普段の私はわりと慎重に考えて動くタイプですが、移住に関しては、『とにかくここだ』という直感で決めてしまいましたね」

地域の人たちとつながるために

こうして一軒の古民家に引き寄せられて始まった大原野での暮らし。そこには俣野さんが求めていた、人とのつながりを深める機会が、たくさんありました。

「地域に早くなじむためにも、『なんでもやりますー』というマインドで、

夫婦で運動会に参加したり、自治会の役を引き受けたりしていました。その中で隣人のご家族には、とても親切にさせていただきました。引越後の挨拶をしたのが年末だったのですが、数日後にある餅つき大会に誘ってくださって。喜んで行くと、その場でたくさんの人を紹介してくださいました。すぐ近くにそうした方がいて、本当に恵まれていたなあと感じます」

折しも、移住とほぼ同じタイミングで、地域活性化をめざす大原野「地域ブランド」戦略がスタート。ダンカンさんがデザインのスキルを生かして取組に関わることで、さらに地域の人たちとのつながりが広がっていきました。

大原野の魅力を伝えていきたい

また自らも、自宅で映画上映会やバーベキューなどの交流会を企画しつつ、人との出会いを楽しむ日々を重ねてきた俣野さん。「もうすっかり大原野が私の『ホーム』です」と話します。

「例えば外出先から家に向かって帰っていると、小塩山が、『おかえり』と呼びかけてくれているような気がするんです。大原野に対してははじめは『いいところだなあ』とぼんやり感じていただけだったのが、10年間で『ここが私の居場所なんだ』という実感に変わった気がしています。それが『ホーム』だと感じる理

由なのかなと。それは夫も同じです。

先日、生まれ故郷のオーストラリアの帰省から戻った際に、『大原野が自分のホームだ』と話していましたね（笑）」

その心境の変化は、俣野さんとダンカンさんが大原野に根を張りつつあるということなのかもしれません。これからは通訳ガイドという仕事を生かして、大原野で色々なことにチャレンジしてみたいです、と俣野さん。

「四季折々にある大原野の魅力を地域内外の人たちにもっと伝えたいです。特に長年大原野で暮らしている人たちが、大原野の良さを知らないように感じるのが残念で。引越越し当初は、『何もないところなのにどうして来たの』とよく周りの人に不思議がられました。そうした人と大原野に訪れた人をつなぎつつ、お互いに大原野の魅力を知る機会を作りたいと考えています」

様々な市町村が移住の取組に力を入れている昨今。移住希望者と移住先とのミスマッチを避けるため、お試し移住などの仕組みも充実しています。しかし、それだけが正攻法とは限りません。俣野さんと大原野の関係から、自分自身の感覚を信じて移住先を選び、その後から丁寧に地域へなじんでいく――そんな移住のしかたもあるというヒントをもらいました。

Profile

俣野麻子（またのあさこ）

1978年京都市生まれ。滋賀や大阪での暮らしを経て、2013年に大原野へ移住。フリーランスの京都市認定通訳ガイドとして、日々、海外からの旅行客を京都市内各所へ案内している。



西山連峰の麓に広がる四季折々の田園風景や、数多くの神社や史跡とともに、先人から連綿と受け継がれてきたまち、大原野。

大原野は、古から現在に至るまで様々な人が集い、長く栄えてきました。

自然の恵み豊かなこの土地を耕し、暮らしを営み、今日の大原野をつくっている人たち。

大原野に魅かれ、「この場所で新しく何かをしていきたい」と考えている人たち。

今、大原野では、こうした人たちが出会い、ゆるやかなつながりが生まれつつあります。

大原野に暮らす人も大原野に関わる人も、混ざり合い、語り合い、関わり合うことで、何かが始まるかもしれません。

そんな可能性に期待し、大原野のより良い「未来」をめざして、ひとやコトのつながりが連鎖し、色々な取組がポコポコと生まれ、なんやかんや！と活気のある大原野が、これからも続くことをめざしたい――。

そのためには、長い歴史の中で形づくられてきた大原野の風土や文化に敬意を払いながら、一人ひとりが大原野の「今」を楽しむことが大切だと考えます。

一人ひとりの「今」が積み重なり、大原野の「未来」がつくられていきます。もちろん、「失敗」も、未来をつくる大切な「今」の要素です。

時には何かに挑戦したり、誰かの活動を応援したりしながら「今」を楽しみ、なんやかんや！と活気ある大原野を、大原野に集う私たちみんなでつくりていきましょう。

将来像を実現するために、なんやかんや「大原野」推進協議会は、これまでの活動の「担い手」から活動の「つなぎ手」へ役割を変えていきます。

大原野を愛する人たち同士がつながり、やりたいことを実現したり、課題を解決したりすることを、協議会が応援し、大原野がより一層、活気ある魅力的な地域になっていくことをめざします。

大原野「地域ブランド」戦略やつなぐ・つながる「大原野」づくりプロジェクトの詳細は、こちらからご覧ください！

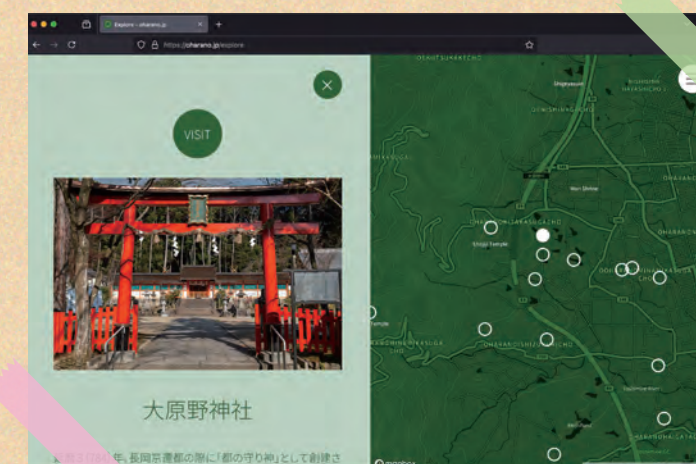


つなぐ・つながる「大原野」づくりプロジェクト、スタート！
「なんやかんや」「大原野」推進協議会がこれからしていくこと

10年間の取組を終えて、大原野「地域ブランド」戦略は、次のステップに進んでいきます。2025年からは新たに、つなぐ・つながる「大原野」づくりプロジェクトがスタート。これからめざしていきたい大原野の将来像を、次のように表現しました。

活動ミニ紹介

oharano.jp



俣野さんとダンカンさんが立ち上げた、大原野とその周辺の情報を発信するローカルメディア。「一過性ではなく、長く役立つ情報をお届けする」ことをコンセプトに、大原野を巡るおすすめルート等を発信している。

サイトはこちらからチェック！





編集後記

協議会に今まで携わってくださった方たちへ、
感謝の手紙を届けるような気持ちで書き進めていたら
誌面があふれボリュームたっぷりの冊子になりました。

改めて、大原野「地域ブランド」戦略をきっかけに
たくさんの方が大原野で起こした10年間だったのを感じます。

これまでの取組とともに、これから
つなぐ・つながる「大原野」づくりプロジェクトを通じて
生まれていく動きが楽しみです。

Hello! Oharano
2025年3月

発行
なんやかんや「大原野」推進協議会

協力
京都市西京区役所洛西支所

デザイン／表紙イラスト
桑田知明 (Kuwa.Kusu)

表紙タイトルロゴ
楠麻耶 (Kuwa.Kusu)

印刷
株式会社グラフィック

